

内的要因の制限因子

“幸福の内的要因を制限する因子とは、持続可能性、賄い可能性、合理性、の3つです”

人間の前頭葉は、快楽の拡大再生産装置です。うまく正の方向に増幅機能が働けば、爆発的な活動エネルギーを発揮し、困難で独創的な発明（昇化）などに寄与することが期待できます。一方で、負の方向へ増幅機能が作用すると、いわゆる、古典的な飲む（アルコール）、打つ（ギャンブル）、買う（SEX）、から、現代の利器であるゲーム、スマホ、ネットショッピングなどなど、精神充足をもたらすはずの生物行動（機化）が過度な依存症をもたらし、生活・人生を破綻させることすらあり得ます。前頭葉は、人間特有の強烈な幸福と不幸の両方をもたらす得る、両刃の剣、劇薬、なのです。そのため内的要因の発動・実践にあたっては、その制限因子を順守することが大切です。制限因子とは、持続可能性（Sustainability）、賄い可能性（Affordability）、合理性（Reasonability）、の3つである。これらの程度は、それぞれの人間分子に帰属する外部要因（＝無形財産および有形財産）に依存するため、人類共通の規範というものはありません。個々でその適用範囲を明確にしなければなりません。

持続可能性（Sustainability） 内的要因は、人間分子の生活・人生が無理なく持続されるよう実施されなければなりません。晩酌で楽しむ日本酒やワインは機化行動ですが、体内に備わったアルコール分解酵素によって一晩の睡眠で十分に分解され、翌日に影響を残さない量に制限されなければなりません。大好きな運動も、次の日に疲れが蓄積されるようではいけません。ギャンブル、ゲーム、スマホなど、1日に投資できる時間を明確にし、その他に費やされるべき時間を侵食すべきではありません。体に取り付けたウェアブル・センサーにより、人間の一分間の腕の動きに関するビッグデータが得られています。その解析結果によれば、我々の一分間の腕の動きの回数は、ボルツマン分布という物理法則に従うことが判明しています（矢野和男^[1]）。流体中の分子の速度分布が、ボルツマン分布に従うことは第2章で述べました。我々は、自らの自由意思で自由に行動していると思いがちですが、その行動パターンは、統計学的には、単純な物理法則に、しかも、分子の速度分布と同じ物理法則に、従っているのです。ボルツマン分布は、簡単に言えば、動きの激しい消耗する運動に費やす時間は少なく、緩やかで穏やかな運動に費やす時間は多い、ということです。このことは、我々が一日に使用できる時間と行動の種類・組み合わせが、大きく制約されていることを意味しています。激しい仕事を一日に何時間もまとめて行うことは物理法則に叶っておらず、持続可能ではないのです。ある世界的著名な小説家が、典型的な一日の生活パターンについてインタビューで語りました。一日のうち午前中の数時間だけ執筆し、後は翻訳をしたり接客をしたりワインを飲んだり、随分優雅だなど思ったものです。その小説家は、長編の執筆はマラソンのようなもので、執筆時間が長くても短くてもいけないと語っていました。一日数時間労働というと怠惰な印象がありますが、その数時間が極めて消耗する労働であれば、それが、持続可能な最大労働時間と言えるのでありましょう。

賄い可能性 (Affordability)

内的要因を持続可能的に継続していくには、それを支える経済基盤が十分なものでなくてはなりません。賄い可能という意味は、個人の経済状況で、十分余裕をもって、継続的に賄うことができることを意味します。安い味がそれなりの発泡酒を分解酵素の許容限度である2缶飲むか、2倍の価格であるが、とても美味しいクラフトビールを1缶飲むか。賄い可能性が同じでも、持続可能性で優れ（アルコール負荷が50%）、機化（食を楽しむ）と質化（上質で美味しい）を備えた後者を選択すべきでありましょう。内的要因の実施に対して、それに見合う適切な代価を支払うこともまた重要です。名著は、それがもたらす社会的遺伝子（ミーム）の効用と通常の書籍代を天秤にかければ、ほとんどの場合、投資価値の高い知化素材と判断されます。立ち読みや貸借図書による読み捨ては、どこか読み手の真剣さを損なうものです。身銭を切って購入するほうが、はるかに無形財産＝知識としての貯留効率が高くなるでしょう。美食は、身銭を切ることにより、知識・経験として深く身につくのであり（質化）、対価を伴わない会社の経費や、人のおごりは、美食そのものに対してではなく、場合によっては受け手が全く予期しない別の意図に対する隠された対価である場合もあり得ます。相手から見て自分に対する純粋な和化行動であることが自明である合理的な施し（入学祝など）以外は、ただより高いものは無い、というリスク意識を持つべきです。単純に自分の財産で買えることを賄い可能性というわけではありません。その人全体のトータルバランスを意識すべきです。バブル期に、日本人の若い女性がパリのブランド店で高級バッグのまとめ買いをして響感を買いました。高級店に入り、高級品を買うのはもちろん個人の自由ですが、その高級品が、その人の生活レベル、社会的地位、年齢など、人間分子としてのトータルバランスに適ったものであるかどうかはまた別問題です。

合理性 (Reasonability) 内的要因は合理性を伴うものでなくてはなりません。あるお笑い芸人はその絶頂期に、工事現場でマンホールから顔を出したおじさんに一千万円もの金を渡したそうです。このような合理性の無い、気まぐれな施しは、真の施しでは無く、むしろ相手に不幸をもたらします。賄い可能ではありますが、毎回このような施しを行うことはできず、そもそもそのような大金を渡す合理的な理由がありません。ルソーは、帰宅途中、善意から物乞いの子供にわずかなお金を恵んだところ、初めは感謝されていたものが、日を重ねるごとに恵みが当たり前のようになり習慣化し、次第に自身の精神的重荷となり、ついに帰宅経路を変更した逸話を語っています^[2]。持続可能であり、賄い可能であっても、合理性の弱い、気まぐれな和化は避けるべきなのです。

参考文献

[1] 矢野和男、データの見えざる手、草思社文庫

[2] ルソー、今野一雄訳、孤独な散歩者の夢想、岩波文庫